

## 写真の町宣言

引用：<http://photo-town.jp/higashikawa-prize/index.html>

「自然」と「人」、「人」と「文化」、「人」と「人」それぞれの出会いの中に感動が生まれます。

そのとき、それぞれの追間に風のようにカメラがあるなら、人は、その出会いを永遠に手中にし、幾多の人々に感動を与え、分かちあうことができるのです。

そして、「出会い」と「写真」が結実するとき、人間を謳い、自然を讃える感動の物語がはじまり、誰もが、言葉を超越した詩人やコミュニケーションの名手に生まれかわるのです。

東川町に住むわたくしたちは、その素晴らしい感動をかたちづくるために四季折々に別世界を創造し植物や動物たちが息づく、雄大な自然環境と、風光明媚な景観を未来永劫に保ち、先人たちから受け継ぎ、共に培った、美しい風土と、豊かな心をさらに育み、この恵まれた大地に、世界の人々に開かれた町、心のこもった“写真映りのよい”町の創造をめざします。

そして、今、ここに、世界に向け、東川町「写真の町」誕生を宣言します。

1985年6月1日  
北海道上川郡東川町

## ケーススタディ：「写真映りのよい”町”の創造」— 地方都市におけるジェントリフィケーション

飯沼 珠実

\*このテキストは飯沼珠実の「東川町アーティストインレジデンス」応募書類の一部を抜粋、2014年10月に加筆訂正しました。

2007年夏にフォトふれんず(愛称：フォトふれとは、東川国際写真フェスティバルを支えるボランティアスタッフ)として初めて東川町に滞在した際に、この町の戸建て住宅に興味をもった。フォトふれの作業は連日深夜に及んだが、それでも毎日12時から13時までの昼休みは確保されていたので、その時間を使って気になった家を撮って歩き回り、ストリートギャラリーコンテスト(東川国際写真フェスティバルのサテライトプログラム)に参加、銀賞を受賞した。

その後これらの住宅の背景にある「優良田園住宅の建設の促進に関する基本方針」を知った。これは地方都市の過疎化問題、高齢化問題の対策として、特に農山村地域の地域社会維持を目的として、都市部住民の需要(例：自然豊かな田園地域でゆとりや生きがいを求める)との結びつきを活発化させるために講じられた。全国で20余箇所の自治体がこの「優良田園住宅の建設の促進」に取り組んでいるが、東川町は特別に好例といえる。

都市生活者に地方都市への定住を促すために、それぞれの自治体がさまざまな方法を試行錯誤している。2008年には自主研究として、新潟や福井など北陸方面の取り組みの見学を行ったが、塗装の色彩やトーンが保守的であったり、家の形も明瞭なコンセプトのようなものが感じられず、東川町ほどの活気が無かったという印象が正直なところである。東川町の場合は、「美しい風景」という自然の財産を生かし、背景にそびえる大雪山連邦が描き出す稜線と、有機的に解け合うような輪郭をもつ住宅の設計に取り組んでいる。その方法として屋根の勾配の角度、外壁に使用する塗料の色、公道から玄関までの距離などを細かく定め、また地元の木材を使用することを促している。その仕上がりは非常にインパクトがあって、夏の青空にも映え、また冬に東川が雪に覆われる時にも、人々の生活に元気を与えるような、前向きなエネルギーに満ちた建築であるように感じた。

これらのリサーチを踏まえ、2008年夏に再び北海道を訪ね、東川町を中心に、近隣の未唄市(びばい)、由仁町など、この基本方針に認定されている住宅の撮影を行った。全49点の写真をセレクトしてまとめたシリーズ「Real Estate - Houses for the Beautiful Landscape」は、第14回学生CGコンテストで静止画部門で優秀賞を受賞(審査員:畠山直哉、原田大三郎、クワクボリョウタほか)、文化庁メディア芸術祭 2008(国立新美術館 / 2009年)にて展示された。

今回「東川町アーティストインレジデンス」を知り、数年ぶりに東川町の優良田園住宅の建設について調べてみると、わたしが撮影した時からさらに区画を増やしていることが分かった。<日本の地方都市におけるジェントリフィケーション>というテーマに興味をもち、再びこの「優良田園住宅」を撮影したいと考えた。それを実現する絶好の機会として「東川町アーティストインレジデンス」に応募する。

(いいぬま・たまま / アーティスト)